映像業界の
はじめの一手 DX

JECTOR

目次

DX の波、きてます。 3
映像業界、進まない DX 4
DX 推進の落とし穴 5
DX 推進の在り方 6
映像制作のためのクラウドストレージ JECTOR 8
JECTOR の特徴 9
JECTOR による DX 事例 - 東映株式会社 10

DXの波、来てます。

DXとは？

書籍、記事、セミナー ... さまざまな媒体で語られる「DX」。2018年には経済産業省よりDX推進ガイドラインが発表されるなど、ビジネスシーンではいまや当たり前に使われる言葉になっています。

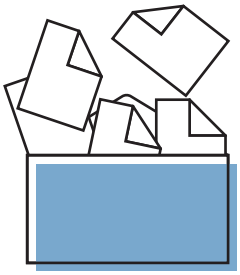
DX（デジタルトランスフォーメーション）とは、データとデジタル技術を活用して、業務そのものをはじめ、組織、プロセス、企業文化、風土を変革すること。流れの早い現代社会において、対応力のある企業になろうという動きが背景となっています。

DXの波は業界を超えてやってきています。アフターコロナのいま、映像業界においても働き方や業務フローに変革が求められています。

本ホワイトペーパーでは、映像業界におけるDX推進の現状を分析するとともに、その方法を探ります。

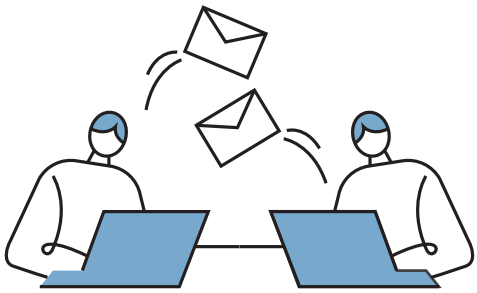
映像業界DX推進の障壁

業界を問わず、今後のビジネス基盤に関わる重要なテーマとなっている『DX』。 これまで変化の少なかった業界も、IT技術による変革を無視できなくなってきています。一方で、映像業界特有の環境や慣習は、DX推進におけるボトルネックとなっています。



大量のフォーマット

一般向けのソフトやサービスでプレビューできる動画は限られているため、確認のためには専用環境が必要です。

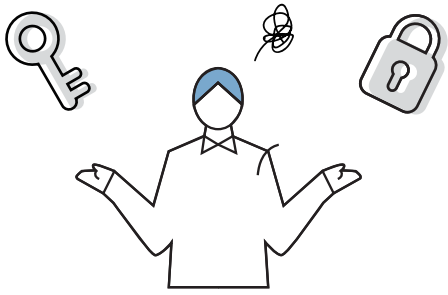


非効率なチェックバック

対面や電話でのチェックバック。口頭の指示は伝わりづらく、確認者のスケジュールに振り回されることもしばしば ...

物理媒体での送付

DVDやHDDなど物理記憶媒体によるデータのやりとりのためにかかるコスト。送付や回収のための事務作業も膨大です。



セキュリティの鎖

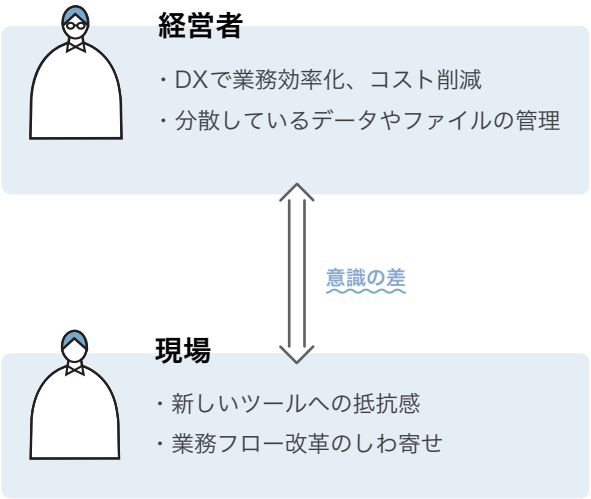
コンテンツは最重要機密。どれだけ便利なツールでも、セキュリティへの信頼は絶対に外せません。

DX推進のおとし穴

CASE 01
DXへの意識の差

さあ、はじめよう。
DXをどんどんやろう。

でもその前に、少し立ち止まってみてください。もっとも大切なのは、業務フローが効率化されることではなく、新しい業務フローが受け入れられ、定着すること。そのためには DX 推進を牽引する経営者が、現場の課題や意見を取り入れ、バランスをとっていくことが大切です。



シャドー IT の横行

効果がないまま
コスト増加

CASE 02
会社に上手く浸透せず、コストが増加

日本企業で DX 推進に成功したのはわずか16% にとどまっています。表面的で適切でない形の DX が推進されると、定着せずに頓挫してしまったり、意図しない負担が増えてしまうこともあります。
例えば、企業側が把握していないサービスを従業員が無断で使用する「シャドー IT」。社内ニーズのすり合わせができていないまま DX による改革が推進されると、効果のないままコストが増加してしまうことも。
DXの失敗を防ぐには、システムや技術の導入だけではなく、その定着を図る必要性があります。

DX 推進のカギ

01 DXの必要性を社内で共有する

DX 成功のカギはビジョンの共有です。
経営層から現場に至るまで、「なぜ改革が必要なのか」「どのように進めるのか」を協議し共有することが大切です。

また、「DX」の定義や方法は業界や企業によって多種多様です。自社にとっての DX のゴールとは何かを明確にし、模索する必要があります。

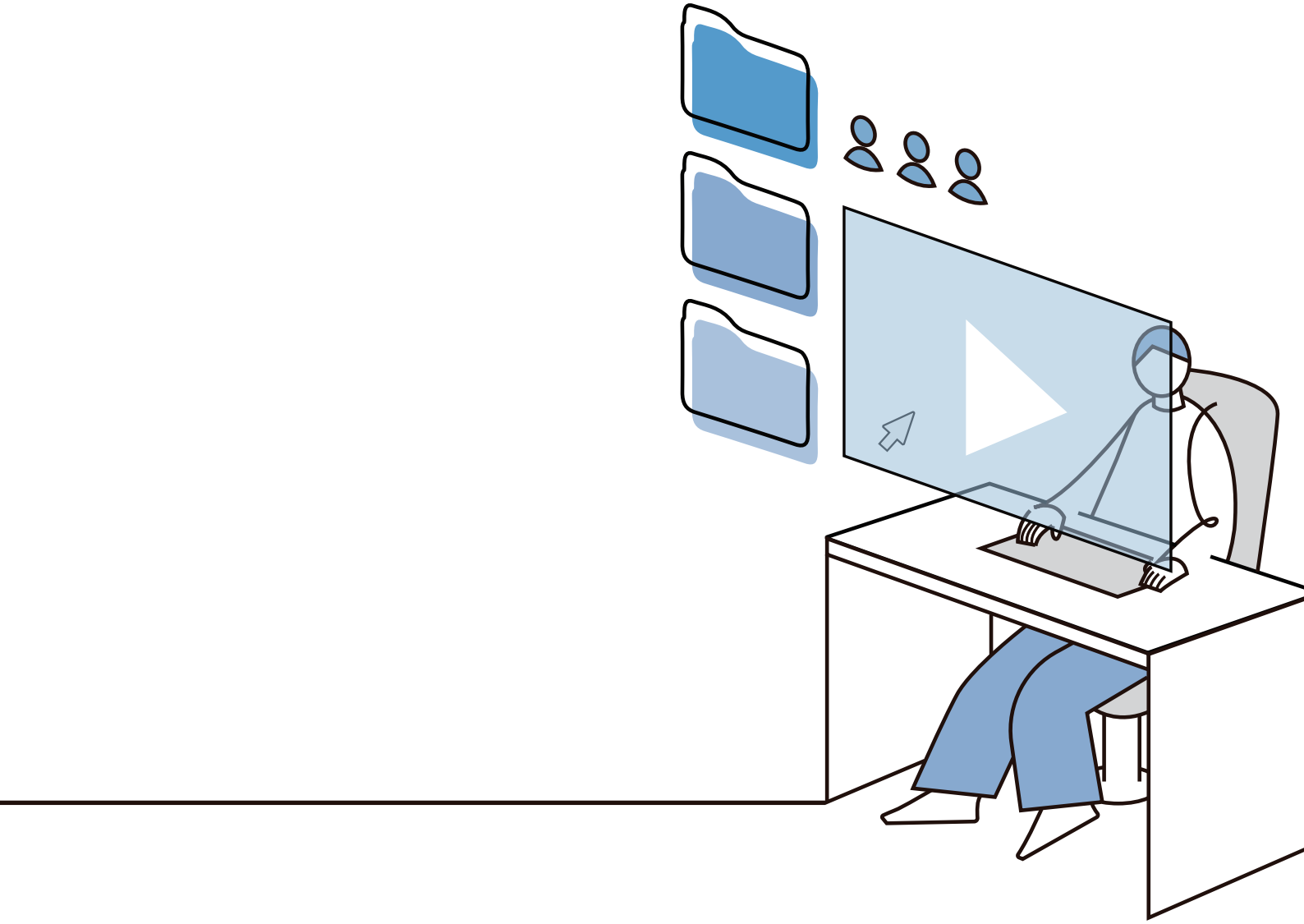
02 「目的」と「手段」

DX と IT 化の一番の違いは、IT 化が IT 技術の導入をゴールとするものであるのに対し、DX は IT 技術を手段とした新たな価値の創造を目的としているところです。システムや業務フローを改革することそのものではなく、それを活かしてどのような価値を生み出すかを明確にすることが DX 成功のカギとなります。

03 データの活用

これまでのコンテンツ管理は、外部に流出させないためのセキュリティや機密性の高さを重視していました。しかしながらIT技術の導入を前提とするDXにおいては、データやコンテンツの可用性を確保することが不可欠です。

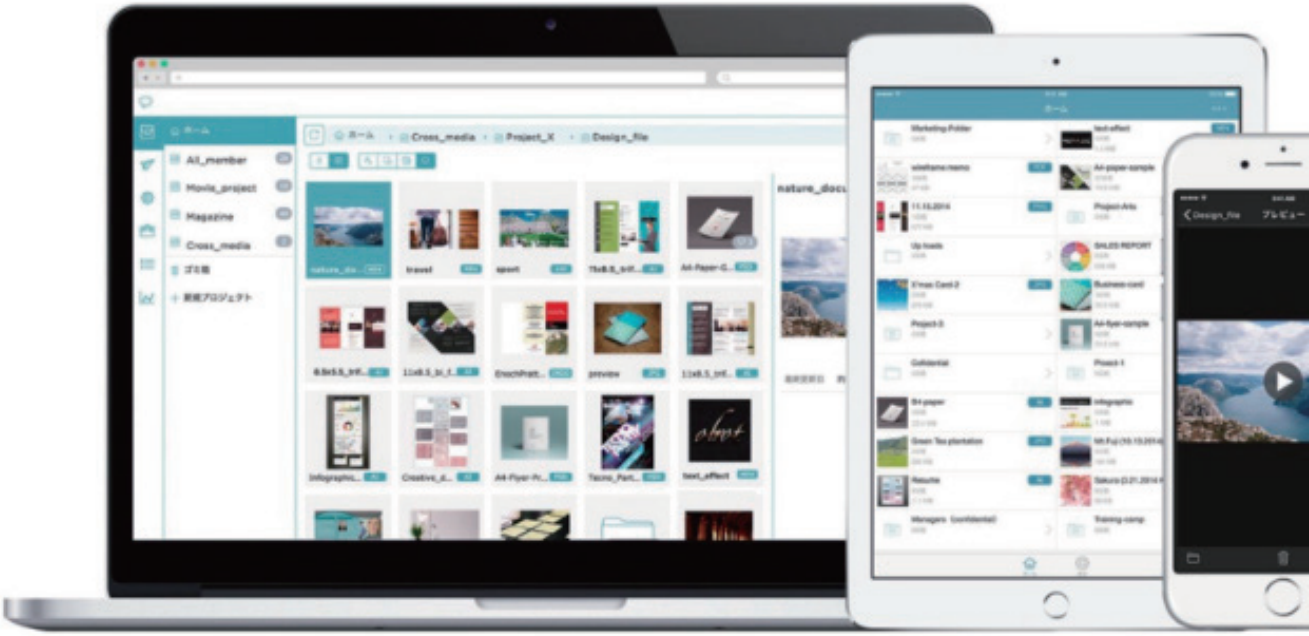
制作した、あるいは保有している映像や素材といったコンテンツを、必要な時に、必要な形で使えるシステムや環境の整備が求められます。



JECTOR

クリエイティブ業界に特化した
今までにないクラウドストレージ

JECTOR はクリエィティブな企業のための機能と直感的に使えるインターフェイスで映像制作の DXを助けます。



あらゆるデータを扱う
クリエイターへ

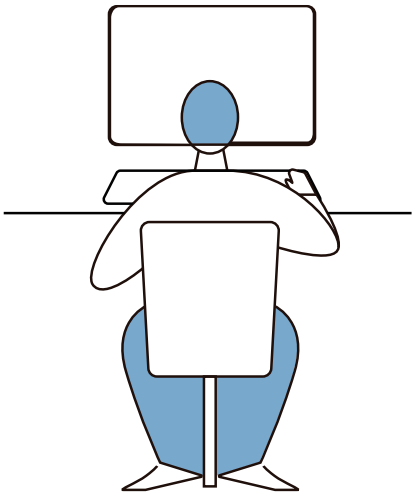
容量やファイルのフォーマットに左右されずにデータを扱うことができ、動画などの「見れない問題」を解決することができます。プロジェクトのための制作メモや予算表から、実際に撮影した動画や音声まで幅広い業務に使用することが可能です。

データのやりとりを
JECTOR ひとつで

JECTORには大切なアイデアをクラウドに保管するストレージの機能と、そのアイデアをブラッシュアップするための機能がありますクリエイターのアイデアが集う「港」としてあなたのチームやプロジェクトの成功をサポートします。

みんなが同じように みる

JECTOR では映像や画像を Web ブラウザ上でプレビューできます。みんなが同じ環境で見ることで、同時に、素早く、複数のメンバーでデータの内容を共有することができます。

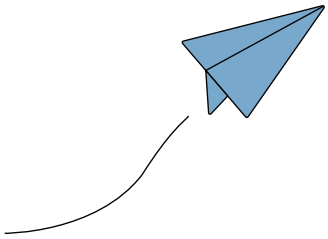


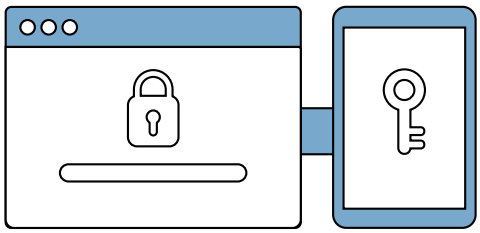
みんなで そだてる

ファイルに対してのコメントはチームメンバーの中で確認ができます。マーカー機能を併せて利用することで、言葉だけでは伝えづらい修正指示を誰でも簡単に行うことができます。

すばやく おくる

ファイル便 / ファイルリンクなら大容量のデータもスピーディに送ることができます。送られたファイルはアカウントの無い方でもブラウザ上でプレビューすることができ、スムーズな共有が可能です。





みんなで共有しながら まもる

二段階認証や詳細なメンバー権限の設定により、大切なデータを安全に管理、共有することができます。社内外でのやり取りは、全てログとして記録されます。

東映株式会社

使い勝手がよく、さらにセキュリティが強固であること東映は JECTORを選びました

左：東映株式会社 松本拓也様、中：株式会社東映テレビ・プロダクション 八木明広様、右：株式会社東映テレビ・プロダクション 川崎秀彦様

01 課題

- 非効率なチェックバック、コミュニケーション
- 情報漏洩への危機感

02 導入

- セキュリティを担保しつつ、簡単便利に使えるツールの導入

03 結果

- セキュリティへの安心、IT 教育コストの削減（経営層）
- 抵抗なく導入、使いやすさの実感

JECTOR 導入の背景

JECTOR はプロデューサーからのジャッジをタイムリーにとるためのツールとして利用しております。東映のケースですが、プロデューサーは様々な打ち合わせに出席する必要があり、さらに、東京－京都間を頻繁に往復したり海外の撮影現場に行ったりと大変多忙です。チェックやジャッジが遅くなればなるほど納期が厳しくなります。プロデューサーがどこにいても簡単にデータを確認してもらえる使い勝手のよく、セキュリティ面も優れているツールを求めていました。

コンテンツをビジネスとしている我々にとってデータは命です。絶対に第三者には漏らしたくありません。マネジメント側は強固なセキュリティシステムを導入し、社内規定を厳しくし、リテラシーを高める教育をおこなおうとします。しかし、厳しくすればするほど制作現場が苦しくなるのも、また事実です。

最近、「シャドー IT」という言葉をよく耳にします。マネジメント側が把握・許可していない状況で従業員が勝手に IT 機器や WEBサービスを利用することを指す言葉です。「シャドー IT」が元で事故や情報漏洩が多々起きているとも聞きます。制作現場としては、「とにかく納期に間に合わせる」ことが最重要課題ですから、「プライベートで使っていて便利だから職場でも使おう」と考えてしまうのは、ある意味否定しきれません。そこで、我々東映は「マネジメント側がセキュリティを求めるのであれば、セキュリティを担保しつつも、現場が回るように簡単便利に使えるツールをマネジメント側が用意すること」が重要だと考えました。それから 4 年。選びに選んだすえ、導入したのが JECTOR です。

数ある WEB サービス、ツールの中から JECTOR を選んだ理由とは？

マネジメント側が安心できるセキュリティと、ユーザ側が使いやすい簡単便利な機能でこれだけバランスの良い製品は JECTOR しかありませんでした。

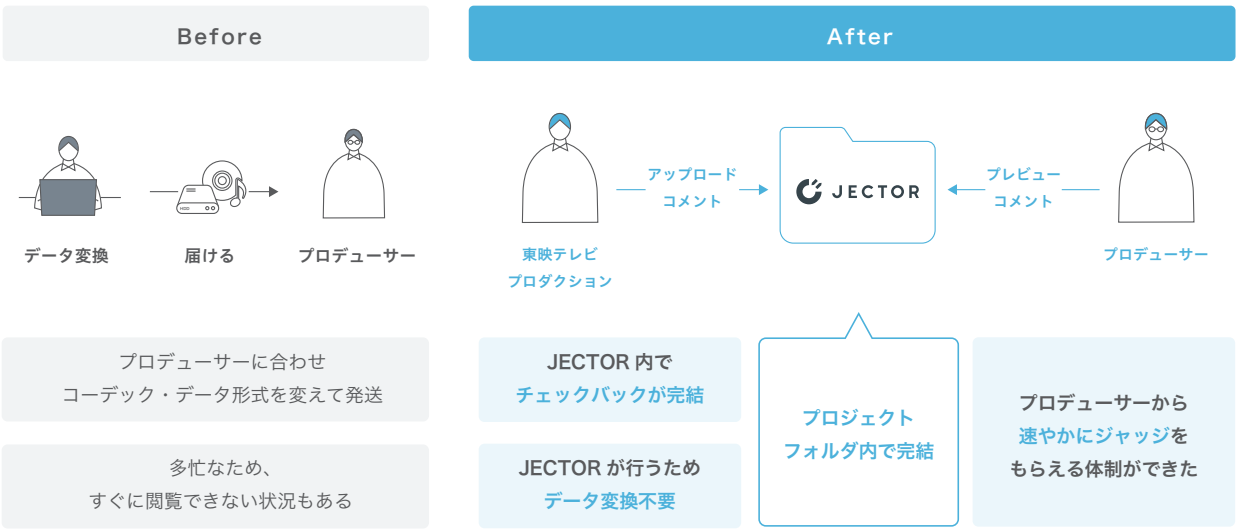
JECTORとの出会いは 4 年前の Inter BEE です。前述したように、我々は制作現場が簡単便利に、かつセキュアな環境下で使用できるツールがないか探し始めていました。JECTOR のデモ版を見て「痒い所に手が届くことを提案している」と感心はしましたが、正直なところ他社も含めて我々の要求を満たすまでに至っていませんでした。

しかし、テクノロジーの進化は速く、ここ 2、3 年の中でバージョンアップを繰り返したいくつかの製品が候補に挙がってくるようになりました。JECTORももちろん候補に入っていました。東映ではデータの運用を、（1）データを確認するための運用、（2）データを送付し合うための運用、（3）データを納品するための運用と分けて考えています。そのなかで、（1）データを確認するための運用はまずは JECTOR で試してみよう、トライアルしてみようとなりました。理由はシンプルで、候補に挙がった製品のデモを比較したところ、スペック面で JECTOR が最も優れていたからです。

実際にトライアルしてみたところ、スペックもさることながら、使い勝手がとても良く、ユーザーフレンドリーでした。簡単な説明だけでユーザが使いこなせるのは運営側の負担が軽減できます。

また、他社製品よりも、JECTOR の担当者の対応が良く安心できました。トライアル後に行った利用者へのヒアリングでも、「使いやすい」との評価が多く集まりましたので、文句なしに JECTOR を導入することになりました。導入後の成果になりますが、JECTOR を使えば、利用者が見たかどうかログで把握できますので、確認のための電話やメールが削減できました。これは単に手間や時間が減ったということだけではなく、気持ちの面でも楽になったことを意味します。

必要なジャッジをもらうためとはいえ、多忙なプロデューサーを電話やメールで追い回すのは気が引けます。導入前は、「これで重要な会議が止まったらどうしよう」「ロケ中の作業が止まったらどうしよう」など、制作現場としてもかなり気を使っていましたが、それがなくなりました。



東映株式会社のワークフロー

また、以前は映像データを各プロデューサーの視聴環境に合わせてエンコードしていましたが、JECTOR でアップロードすれば視聴者側に合わせて自動的にエンコードされますので、エンコードの作業自体が丸々なくなり、大きな負担減につながっております。
プロデューサーも、スマートフォンや PC で簡単に確認できるようになりましたので、移動中や現場での隙間時間の有効活用につながり好評です。

「直感的に使える」というのも JECTOR の良いところです。基本的な使い方は導入時に説明しましたが、いつの間にか皆がそれ以上の、一つ上のステップで使いこなすようになっていました。それには驚きました。JECTOR 導入前は、わざわざ画面キャプチャーを撮って、ワードなどに貼って、「ここをこうやって！」と文章で指示が戻ってきていました。今は、それがなくなりました。つまり、確認して戻すプロデューサーにとっても、JECTOR を使った方が負担が減って楽だと思っているわけです。

最後に、以上のことが、セキュアな環境下で実現できておりますので、マネジメント側としても満足しております。JECTOR はマネジメント側が安心できるセキュリティ、ユーザ側が簡単便利に使える機能や UI を兼ね備えたバランスの良い製品だと思っております。

JECTOR

株式会社ねこじゃらし
〒104-0045 東京都中央区築地3-7-1 TSUKIJI GRANDE 5F
Tel : 03-5572-6564　Mail : info@jector.jp　Web : https://jector.com/

17000374
ICMS-SR/0087/JIS Q 27001 (ISO/IEC 27001)